

# 宰府画報

第5号

2021年3月  
(令和3年)

発行  
太宰府市教育委員会  
文化財課



バックナンバーはこちらから

## 調査見聞

### 吉嗣家報告書【印章編】が完成しました!!

絵師調査報告書第二弾

今年度、太宰府の絵師調査事業のメイン事業として作成していた報告書が完成しました！今回発行した報告書は、江戸時代後期の筑前を代表する絵師齋藤秋圃に絵を習った吉嗣梅仙、その息子で近代南画界（※1）の中心人物として活躍した拝山、そして拝山のおとをうけて大正から昭和にかけて活躍した鼓山の吉嗣家3代にわたる資料群から印章類を中心にまとめており、太宰府の絵師調査事業としては2年前に刊行された『齋藤秋圃・梅圃関係資料』に続く、2つめの報告書になります。



報告書表紙

印章にまつわる資料

報告書には吉嗣家に伝わる約280点の印章に関する情報を記載している他、絵馬や襖絵などの大型作品の捺印時に使用したと思われる雅印型や、印章を作成した際に作者（篆刻家）や作成年代の情報が記されている印箋、吉嗣家3代が使用した印章を収集している印譜、印章を作成するための材料となる石や動物の角などの印材といった、印章に関連する様々な資料を掲載しています。

報告書刊行にあたる調査により、ひとくちに印章といっても、印面の大きさが1cmに満たない小さなものから、10cmを超える大型のものまで、吉嗣家には多種多様な印章が伝わっていることがわかりました。その材質や見た目も様々で、動物

を模ったもの、植物や山水風景を刻んだものなど、ただ判を押すだけでない工芸品としての側面も持っています。龍や獅子など、中国の空想上の動物が彫られた印章や、漢詩の語句が印文（※2）に見られるのは、南画や漢詩を生業としていた吉嗣家ならではの資料といえます。



約280点におよぶ印章

#### 今後期待されること

報告書刊行に伴う調査により、梅仙・拝山・鼓山がどのような印章を使用していたのか、総体的な把握が可能となりました。また、印章が作成された時期が判明することで、吉嗣家3代の動向を探る手掛かりになる他、印章を制作した篆刻家が明らかになることで近代の文人と篆刻家との繋がりも見えてきます。吉嗣家には日本各地の篆刻家の印章が伝わっており、近代文人家の幅広い交流を伺わせるものとなっています。今後、この報告書をもとにさらなる研究の進展が期待されます。報告書は4月以降、市内図書館や文化ふれあい館、大宰府展示館で御覧いただけます。（木村純也・文化財課）

#### 【キーワード】

- ※1 南画 中国の元・明の絵画に影響を受け日本で江戸時代中期以降におこった画派の一つ
- ※2 印文 印面に刻まれた文字

## メイシヨ メイブツ 古香書屋

吉嗣家3代の絵師の始祖となり、江戸から明治にかけて活躍した吉嗣梅仙は、幕末の動乱により京都から太宰府へ西下した三条実美ら五卿と、絵や和歌を通じて親交を深めました。梅仙を厚遇した実美は、その住まいに「古香書屋」の号を贈ります。「古香」とは梅のことで、吉嗣家には、竹や水晶に「古香書屋」と刻んだ印章が伝わっています。

この建物については、梅仙の長子で、不慮の事故で右腕を失いながら詩書画三道に優品を遺した拝山が、明治44年に建て替えを行ったとされています。また、昭和42年から50年間は、拝山の長子、鼓山の孫に当たる当主の間、知子夫妻が会席料理店「古香庵」を営み、令和元年には古民家ホテル「ホテルカルティア太宰府」として生まれ変わりました。入口には現在も三条実美筆の扁額が掲げられ、往時の面影を伝えています。

なお、敷地内の蔵の梁上にも、大正3年に拝山が建てたことを示す墨書が残っています。今回調査を行った印章のほとんどは、この蔵の中に保管されていたものです。（井上理香・文化ふれあい館）



かつての会席料理店「古香庵」と、ホテル・カルティア太宰府に今も残る「古香書屋」の扁額。



# 逸品探訪

太宰府の絵師に関連する逸品・名品を紹介しします

吉嗣よつぐいざん 拜山かまど 作

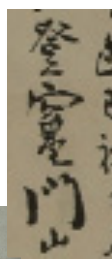
## 【竈門登山詩画】

何が描かれている？

細長い画面の下方に描かれているのは、髪を結び、髭をたくわえ、中国風の衣を着た8人の男性です。語り合う人、腰を下ろして休む人、空を見上げるように顔を上へ向ける人、片手を広げて何かを示そうとしている人などポーズは様々です。かたわらに二つの瓢箪ひょうたんと手提げ箱が描かれるのみです。登山の題が付いています。山は描かれず、かわりに画面の上方には、墨書きの文字が余白を埋め尽くすようにびっしりと書かれています。

読める文字をさがす

この作品のタイトルは、拜山の息子、吉嗣よつぐいざんが記した箱書「獨賢翁拜山竈門登山詩画小品」によるものです。竈門かまど山はすなわち宝満山のことです。文字はくずし字なので読みづらいですが、わからない文字は思い切って読み飛ばし、太宰府の地に関係あるもののだと想像力をはたらかせて見てみると、「都府樓之礎」「観音寺之鐘」「水城」などの文字を発見することができます。文章の最終行に



(上) 登竈門山(竈門山に登る)と記す(左部分拡大)

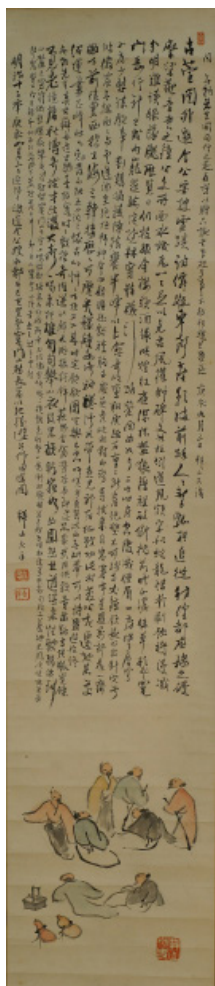


は、制作年や筆者名などが記されていないので、ここをよく見てみると、明治13年という年紀とともに、拜山が渡辺令公(渡辺清※)のお供をして太宰府の名所めぐり、翌日に竈門山に遊んだことを長編の詩と絵にしたという制作事情がわかります。

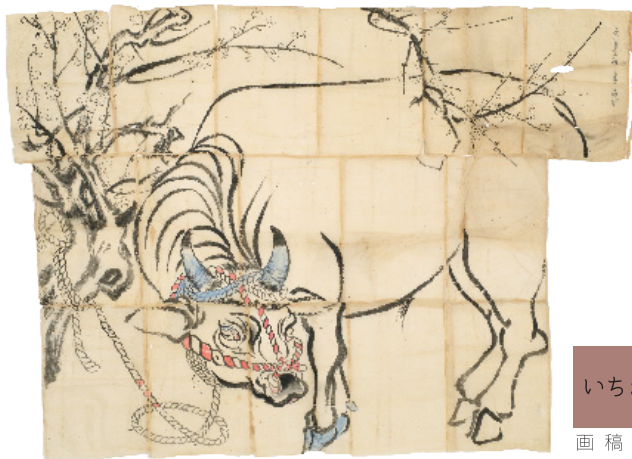
気分を味わう

太宰府の名所旧跡の様子や歴史、山頂から見た美しい景色や感慨が、拜山得意の漢詩によって綴られますが、くずし字に加えて漢詩を理解するのは至難の業です。ですが、いくつかの文字や雰囲気からわかるだけで作品の見え方はちがってきます。限られたキーワードをたよりに、彼らの会話や視線の先にあるもの、作品に込められた思いなどを想像してみることが、絵画の鑑賞法のひとつです(井形栄子・絵師調査チーム)

※渡辺清(1835-1904) 明治期の官僚、政治家。長崎大村の人。明治7年から14年まで福岡県令(今の知事にあたる)をつとめた。



紙本淡彩・巻子装 94.2×199.9cm 明治13年(1880) 吉嗣家資料(個人蔵)



いちまい 画稿鑑賞

紙本墨画一部彩色 103.5×140.5cm 文政13年(1830)

齋藤家資料

## 【梅花に牛図】

大きな梅の木につながれた一頭の牛が、堂々たる顔つきで顔をこちらに向けています。飛び梅や撫で牛など、梅と牛との取り合わせは、天満宮あるいは菅原道真公とのゆかりを暗示し、縄が紅白であることから、祝意のこもった主題だと想像されます。道真公は丑年生まれ、今年(1830)は98回目の年男のようです。

縦横1メートルをこす画面は、現状16枚の紙をつなぎ合わせて作られています。牛の角や蹄、縄の一部に赤や青の彩色があり、「朱」「白」「アイクマ(藍隈)」などの注意書き(色注)も見られます。大画面と縦横の長さの比率から、絵馬の下絵、あるいは模写である可能性も考えられます。右上裏面には文政13年の正月に写したという墨書があります。(井形栄子)

ひとことくずし字

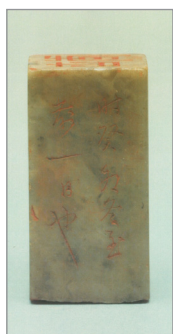
## 【古香】

今回は印章報告書刊行記念として、いつものくずし字ではなく、印章で使用される篆書体と呼ばれる文字についてご紹介いたします。篆書体とは中国でできた漢字の書体の一種で、現在は印文で用いられることが多い文字です。

この画像の文字、何と読むか分かりますか?これは前掲のメイショメイブツで紹介された「古香屋」の「古香」という文字になります。「古香」と彫られた印章は吉嗣家資料で複数確認されており、様々な形の印文を見ることができます。この印文の場合は、右が「古」、



左が「香」という字になります。「古」は口の部分から十を飲み込むように線が飛び出しています。「香」は木の部分が大きく変形し、目を覆っているように見えます。2字とも直線的に彫られており、整った印象をうけます。一見すると読めないと思われるかもしれませんが、落ち着いて見ると、元の字の形を連想できます。くずし字の解読とは違う難しさがありますが、字の奥深さを感じることもできる書体ですので、今後も紹介していきたいと思えます。(木村純也)



印章の外観 吉嗣拜山所用印 栗田石癖作 明治36年(1903) 吉嗣家資料(個人蔵)

タイトル下のQRコードからバックナンバーをご覧いただけます。ぜひご利用ください。